

II 植生概観

1. 鹿児島県北東部

鹿児島県北東部は、開発をまぬがれ、県内ではもっとも開発度の低い地域である。宮崎、熊本両県との県境付近には1000 m内外の山岳が立ち並び、自然林のしめる割合は大きい。

この県北部は、地形的な特徴から霧島火山帯地域、大口部付近の山地および薩摩～栗野町の低山地域に分けられる。

霧島火山地帯は、主峰韓国岳(1700 m)をはじめ、高千穂峰(1574 m)、新燃岳(1431 m)などの活火山がつらなりカルデラ湖や硫黄噴出などもあって最も風光明媚な地帯である。同地帯は国立公園として保護地域に指定されているため、霧島温泉付近にはタブ、アカガシ、ウラジロガシ、アラガシ、アカマツ、モミ、ツガなどの発達した常緑広葉樹の自然林がみられる。海拔900 m以上ではブナ林が出現し、県内では紫尾山とともにブナ帯(夏緑広葉樹林域)の植生が見られる点でいちじるしい特徴をもっている。韓国岳や高千穂峰の山頂部にはミヤマキリシマをはじめとする風衝低木群落が生育している。

大口市の北方の山地は、熊本県県境に連なる国見岳(968 m)、間根ヶ平(893 m)、黒園山(564 m)など中級の山々が深い谷部を形成している。この地域は大口管林署の管轄のもとに、近年までコジイ、アカガシ、ウラジロガシを主とする自然林が生育していた。しかし、現在、林道は奥地にまで進み、天然林の伐採によるスギーヒノキ植林化が進んでいる。また、大口市は川内川の支流によって形成された沖積低地に立地し、水田が広がっている。

薩摩町から栗野町にかけての低山地帯は、海拔600 m内外の山々が点在する他は、大部分は200～300 m内外の丘陵地帯となっている。丘陵はアカマツの植林地とスギーヒノキ植林となり古くから様々な土地利用が行なわれており、いわゆる里山的な地方である。烏帽子岳(703 m)や安良岳(604 m)などの山頂部にはコジイの二次林が残存しているが現存植分は少ない。

丘陵間の谷部は畑耕作地や水田耕作地となっているがいずれも小規模である。

2. 薩摩半島北西部

薩摩半島北西部は米ノ津川流域の沖積地・沖積低地を中心とする出水・矢筈岳地区、阿久根海岸より川内川までの阿久根・西方地区、海拔500～1067 mまで連なる出水山地、さらに川内川上流の沖積地を中心とする宮之城・東郷地区にその特徴が示される。

a 出水・矢筈岳地区

出水市及び野田村の沖積地・沖積低地はきわめて面積が広く、米ノ津川、高尾野川、野田川、折口川の遊水地としてかつて広がっていたと考えられる。現在は河畔が整備され、鹿児島本線ぞいに集落が形成され、沖積低地は水田耕作が行なわれている。集落中にはモウソウチク林、スギ植林がみられる。沖積地は畑耕作が行なわれ野菜類が栽培されている。米ノ津川、高尾野川河口には現在九州ではきわめて少なくなったフクド、シオクグなどの塩沼植生が局地的に残されている。河辺にはツルヨシ群集などの河辺植生がみられる。

矢筈岳は海拔687 mで頂上付近にアカガシ優占のイスノキーウラジロガシ群集が一部残されているが頂上にはみはらしをよくするため、森林が伐採されスキ草原が島状に生育している。山麓部や山腹はスギ植林や、スギ植栽のための切りあと、あるいはボンタンなどの果樹園がつけられ、自然植生はほとんどみられない。

b 阿久根・西方地区

折口～阿久根～西方の海岸断崖地には風衝低木林が発達し、国道3号線ぞいの崖地にはダンチクが飛び石状に群落を形成している。この海岸地区には砂丘の発達がよく、とくに西方海水浴場ではコウボウムギ、ケカモノハシなどの砂丘植生が帯状に残されている。広い砂丘地帯はクロマツ植林が多く、植林と耕作畑地がモザイク状にみられる。

阿久根市佐潟や赤崎では海岸の空中湿度の高い影響もあり凹状地にはタブ林が発達しやすい。林床にゴミ投棄が行なわれている地域が多いが、屋敷林、あるいは斜面の保全林として集落内外にも林分が残されている。

c 出水山地

海拔1067mを最高峰とする紫尾山を中心とする出水山地は薩摩半島北東部の霧島山地についてブナ林が残されていることで知られている。シラキーブナ群集でまとめられるブナ林はわずかに頂上付近にみられるにすぎないが、尾根部には林道がつらなり、わずかにイスノキーウラジロガシ林が島状に残されながら将来伐採される危険性が強い。山腹は殆ど自然林の伐採が終了しスギ植林が行なわれている。わずかに残されている常緑広葉樹林は山麓部にかぎられ、ホンバタブ二次林や、イチイガシを含むイスノキーウラジロガシ林がみられる。谷沿いでは豪雨時に崩壊を起している地域もみられ、山道は常に土砂崩壊の危険が大きい。集落周辺は沖積低地は水田に、集落裏山にモウソウチク林が多くみられる。台地上は畑耕作が行なわれている。

d 東郷・宮之城地区

東郷町・宮之城町・鶴田町は人為的影響がきわめて強く、自然植生はほとんど残されていない。わずかに東郷町に復元途上のハンノキ群落がみられる。川内川流域の沖積低地は水田に、沖積地は畑耕作が行なわれ、小丘陵地にはクロマツ植林、背丈の低いスタジイ萌芽林、スギ植林、モウソウチク林が広がっている。川内川流域県立自然公園においては川幅の広い轟の滝が名勝地として有名だが、周辺の自然が破壊され、クロマツが散在した赤い地肌、岩肌を露出し、自然との調和が破れた赤裸の滝だけの景観を形成している。

3. 長島・黒之瀬戸島

黒之瀬戸島は阿久根市の北西部に南北17km、東西10kmの細長い島で、海拔402mの矢岳を最高峰に海拔200～300mの峰々が散在している。そこに生育する植生も、沖積低地を水田耕作地(ウリカワーコナギ群集)、エンドウマメ、サツマイモの栽培を中心とする畑耕作地(コミカンソウウリクサ群集)が平坦地、緩斜面を中心に広がっている。

山地斜面は広くアカマツ植林、スタジイの萌芽林で占められており、自然植生は著しく小面積に限られている。海岸に面した急傾斜地はオニヤブソテツ―ハマビワ群集、ミズバイ―スタジイ群集の断片的な林分が、線状あるいは帯状にみられる。オニヤブソテツ―ハマビワ群集は島の周辺に沿って細く囲むように残存生育している。黒之瀬戸島の潜在自然植生として広い面積をしめるミズバイ―スタジイ群集、ムサシアブミ―タブ群集は、集落の周囲、裏手の斜面にスタジイ、タブノキの残存林分、ミズバイ―スタジイ群集の萌芽林がみられるにとどまる。尾根筋には自生のアカマツの生育も多くみられる。

黒之瀬戸島は東シナ海から八代海に吹きぬける強い風と頻度の高い人為的干渉により、自然度の高い植生への遷移は遅く、ネザサ―ススキ群集など二次草原が持続群落を形成し、生育面積が広いことが黒之瀬戸島の植生の特徴の一つとなっている。さらに、樹高20mをこえるクスノキ植林が島の北部に生育しており、林内にはヤブツバキクラスの種群が多く生育し相観的にも群落構造上からも自然度の高い林分に類似的林分まで発達している。また島のほぼ中央部にはカモガヤなどが種子散布されている牧草地、放牧地がある。

4. 甌 島

甌島は九州の西南，東シナ海に面して浮かぶ列島で上甌島，中甌島，下甌島の三島と，多数の無人島よりなり，総面積は119平方Kmである。九州本土からはおよそ20～30Kmの距離にあり，行政的には薩摩郡に所属する。

甌島の地形は全体に山地が多く，下甌に最高峰は尾岳(604m)で，青潮岳(510m)口岳(487m)，谷山(446m)などがつづく，上甌は遠目木山(423m)をはじめ一般に低山である。

海岸線は上甌島と下甌島では対照的である。上甌島は遠浅の湾が多いのに対し，下甌では100m内外の断崖が海岸に屹立している。上甌島には，3500mに及ぶ砂州があり，なまこ池と称される塩分含量の異なるラグーンが形成されている。

甌島の気候は，鹿児島北部地方に比較するときわめて温暖で平均気温は17.5℃，年間降水量は2500mmに達し，ヘゴをはじめ琉球列島に共通する暖帯性の植物が生育している。

甌島に人間が居住したのはきわめて古く，縄文・弥生時代すでに先人が居住していたといわれる。その後幾多の変遷をへている。現在，人口約1万5000人を擁しているが，年々減少しているといわれる。

甌島の自然は，古くから島民によって開発され，自然植生は，下甌の各地における常緑広葉樹の小規模な残存林や，海岸断崖地植生にかぎられ，多かれ少なかれ人為的な影響を受けている。下甌は急傾斜地が多く，開発が困難であったため，テラス状のいわゆる段々畑の跡が全島に行きわたっている。下甌島の大部分は，マテバシヤやスダジイの二次萌芽林でおおわれており，自然植生としてのスダジイ林は島の北部にごくわずかに見られるにすぎない。集落の周辺はかつての耕作地にリュウキュウチク林がとくに目立っている。

上甌島は，全島マテバシヤ林とアカマツの植林とでおおわれ，自然度は下甌島より低い。島の西北は放牧地に利用され，ススキ草原が，広く分布している。集落付近には休耕水田が多いのが目立つ。

上甌島と下甌島との間に位置する中甌島は島の産物であるカノコユリの栽培のため，火入れされており，全島がススキ草原と化している。